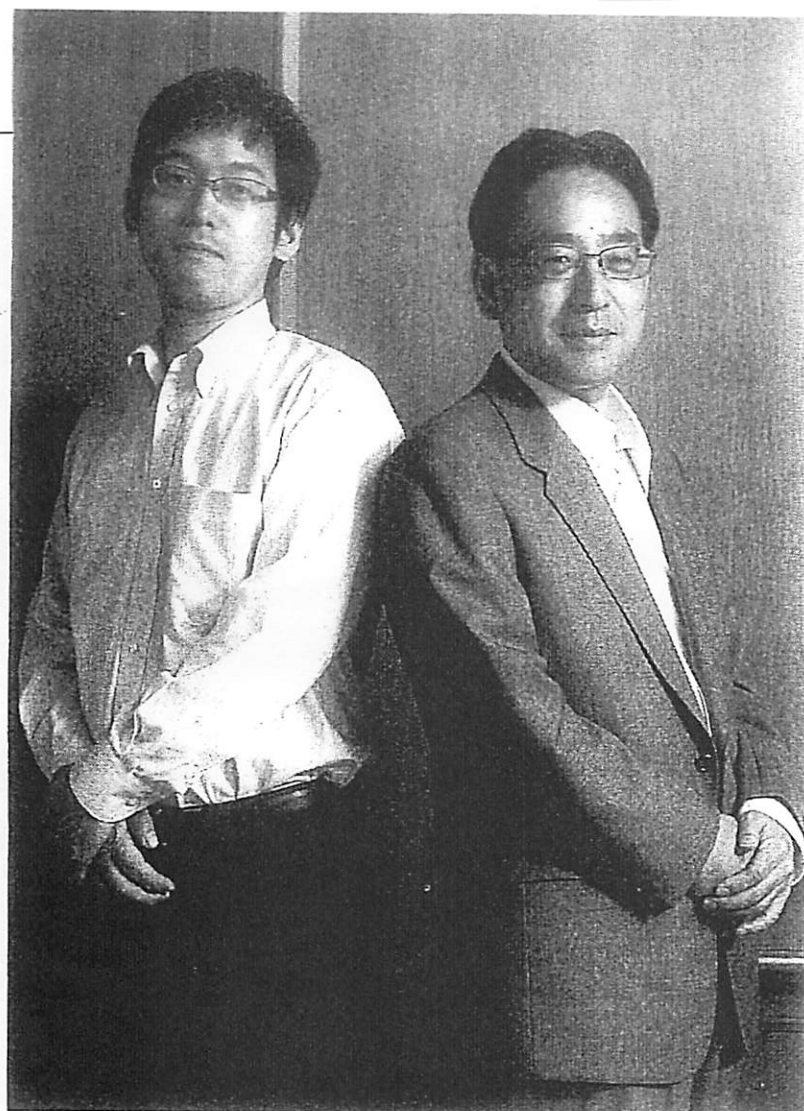


あらたまさふみ
新雅史

もたにこうすけ
藻谷浩介

日本総合研究所主席研究員



著書で画期的な商店街論を展開した気鋭の社会学者が、「商店街的なもの」に見出した可能性とは——？
町づくりから見えてくる日本社会の未来図。

「商店街」こそが 新しい希望である

対談

藻谷 『商店街はなぜ滅びるのか』（光文社新書）、本当に面白く拝読しました。これは実は商店街そのものが主題ではなくて、大正期から今まで日本人と日本社会がいかに変容してきたかを、商店街を手がかりに、一気呵成に語った本ですね。懸命に頑張っている商店主や「まちづくり」の専門家からは異論もありそうですが、むしろ気にしなくていい（笑）。この本が分析しているのは商店街の内側ではなくて外側、商店街がその上に立っている社会基盤の方なのですから。

私も、「この筆者はまちづくりについては門外漢だろうけれども、専門家が見過しがちな本質を、歴史の中から掘んでいる。相当に学殖豊かなオヤジか？」と思いながら読んでいました。あとがきまで来て、「この人、大学の非常勤で私よりずっと若かったんだ！」と驚きました。

新 ありがとうございます。実は、この本を書くにあたってともともと依頼されたテーマは、商店街ではなく、コンビニエンスストアだったんです。うちの実家が酒屋からコンビニに転業しているという

こともあったのテーマだったのですが、途中で、どうもこれは世間で既に知られている以上のことを書けそうにないなと気づいて、行き詰ってしまった。

ただ、調べものをする過程で、改めて気づかされたこともあったんです。日本のコンビニの床面積は三〇坪くらいで統一されているとか、僕の両親がコンビニを出店した頃は、夫婦での共同経営が前提だったとか。

では、その三〇坪というフォーマットがどこから来てるのかというと、これは商店街の店舗によくある床面積なんですね。特に酒屋のような、倉庫を持っている店が、ちょうどそれくらい。夫婦経営というのも商店街の基本形です。要するに、日本のコンビニは、零細の小売業の人たちの鞍替えを前提として出てきた形態だった。逆に言えば、コンビニの普及は商店街によって準備されていたものだったんです。では、その商店街の成り立ちとは……と興味が向き、調べだすと面白くなりまして。そこに行き着くまでにだいぶ遠回りはしました。

藻谷 そうして調べてみたら、商店街は決して昔からあったのではなく、二〇世紀になって人為的に発明されたものだった、ということが明らかになってきた。

新 ええ。商店街というと、古くからあるものというイメージで議論されやすいですし、実際に商店街の中の人も、補助金を取ってくるときに「何百年続いている」というような伝統を強調したりしますが、そうではないんですね。

それに気づくきっかけのひとつに、二〇歳頃の経験があります。当時、「地球一周の船旅」の企画などをしているピースポートというNGOで働いていて、東南アジアの国々をいくつか回ったんです。

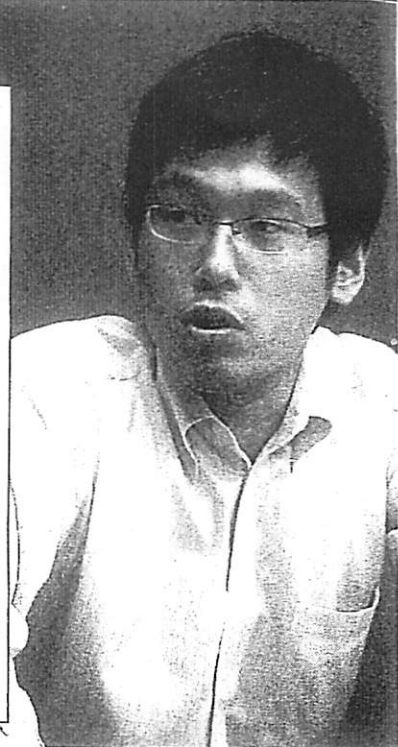
東南アジアにも小売店が並んでいる一角はもちろんありますが、それは商店街と呼べるようなものではないですよ。店構えや風景が明らかに違うということもあります。大きく異なるのは、彼らが決して豊かな中間層ではないということです。日本の場合、商店街の自営業者たちは土地を自己所有する「旧中間層」と言われ、被雇用者である「新中間層」

と同じ中間層として位置づけられています。でも、東南アジアの風景を見たとき、自営業層を「旧い中間層」だと考えるのはおかしいと思いましたし、商店街という存在も決して伝統的ではないはずだ、それは絶対に新しく、しかも意図的につくられたものだ、と、直感的に思ったんです。

藻谷 私も昔、市場経済化を始める前のベトナムで、そんな風景を目にしました。

地方都市の市場に行くと、商人は路面に板を敷いて物を置いているし、肉屋は持ってきた切株をまな板にして肉をさばっている。ハノイの商業地区でも、同じような店が、それこそ五軒おきくらいにあたりする。本の中で、戦前の東京の某地区では店の一六軒に一軒がお菓子屋だったという話が出てきますが、まさにその世界です。何の秩序も管理もない過当競争の中で、店が出来ては潰れている。あれは資産保有層が営む戦後日本の商店街とはまったく別のものですよ。

新 ええ。お店が並んでいるものを商店街だと考えると、平安京の時代からあるという話になってしまう。実際、定評あ



新雅史

あらた・まさふみ

1973年福岡県生まれ。学習院大学非常勤講師。東京大学人文社会科学系研究科博士課程（社会学）単位取得退学。著書に『商店街はなぜ減るのか 社会・政治・経済史から探る再生の道』、『東洋の魔女』論がある。

る百科事典を見てもそう書いてあったりします。ですが、単に商店が並んでいるものを商店街だと言い始めると、商業の成立にまで遡らなければいけなくなってしまうはずで。

藻谷 これまで商店街について論じてきた人の多くは、私も含め「この町は江戸時代から続いている」というように思い込んできた。だが実は、組織化された商店街よりも先に登場したのが、老舗が高度化した百貨店。市場経済原理万能で、手厚い中小事業者保護政策などない戦前、百貨店に対抗するためには、多業種を秩序正しく並べた「横の百貨店」たれ、と

なって近代商店街が「発明」されたと。

実際にはそのような順序だったのですが、先入観には反する。でも新さんの議論に説得力があるのは、そこにご自身の家族史が重なっているからでしょう。

新 たしかにこの本は、僕の父と祖父のライフヒストリーを社会構造の側から語っていったという面もあります。

うちの祖父は唐津（佐賀県唐津市）の造り酒屋で修業してから、独立して小倉（現在の福岡県北九州市小倉北区）に出きて酒屋をやり始めたんですが、明治期までは、小倉を含めた北九州地域はとても新しい町なんです。祖父はそこで国のいろいろな政策に翻弄されながらも酒屋をやって、長男にその店を継がせるんですが、うちの父親は次男だったので、酒販免許は持っていても店を継げず、小倉じゆうを探して、やっと空いていた被差別部落の地域に店を出したようです。藻谷 本の中で、商店街の衰退を不可避にしたのは後継者不足であり、その原因は、商売の担い手が、家族以外の人間も取り込んだ近世商家的な「イエ」から、親

子だけの「近代家族」に替わったことだと指摘されていました。新家の祖父も、イエの論理の世界で修業して、それから「近代家族」を形成されたわけですね。お父様は最初から近代家族として創業する。そして子供の新さんは、跡を継がない。

新 ええ、そうですね。小さな頃から感じていた、「うちは何で地元でもないところで店をやっているんだろう」とか、「なんで酒屋なんだろう」という疑問が、この本を書くことでようやく解決しました。同時に、これは父に向けて書いた本になったような気がします。「あなたの人生ってこうだったんでしょ」という。それがたまたま、ほかの人たちにも共感してもらえたという感じです。

近代家族の崩壊

藻谷 ところが今の世の中はもう、近代家族の先に行ってしまったようですよね。私自身は妻や子どもとまさに近代家族を営んでいるんですが、周囲には結婚しない人、子どもを持たない人が増えています。

新 もう個々人がバラバラになっていますよね。僕の師匠である上野千鶴子は、『家父長制と資本制』という本で、資本主義は近代家族がなければ存立しないことを指摘しました。資本主義の論理で労働者を生産することは不可能です。女性たちは「愛情」という名のもとに、労働者の生産、すなわち出産育児を無償でおこなう。そして男性は、その女性を庇護するわけです。こうした稼ぎ主の男性と専業主婦のセットを近代家族といいます。

上野千鶴子はフェミニズムの立場から近代家族批判をおこないましたが、その構造はガラガラと崩壊し始めているんです。それで、国家がそこへ入ってなんとかその下支えをしようとしているわけですが、全く立ち行かない状態です。仕方がないから今度は企業に対して「労働者が必要でしょ」と説得して、なんとか費用を負担させようとしています。労働者のことをコストとして考える企業側はそれを受け入れることができずに、にっちもさっちもいなくなっています。

藻谷 俯瞰してみれば、長らく続いてき

た「イエ」をぶち壊して個人を解放した近代家族も、実は過渡的なものだった。商店街をはじめ、近代家族が労働者を再生産することを前提にした戦後システムも、長くは続かないということですね。

今後しばらくは、上野さんが言っているみたいに、皆が「おひとりさま」の時代を自分だけで生き抜いていくんだろけれど、その多くのおひとりさまが亡くなったあとの社会は、どうなるんでしょう。このまま滅びていくのか、はたまた、どこかの段階でもっと子どもが生まれるような社会制度に戻るのか。近代家族に支えられた商店街が跡継ぎ問題で崩壊していったのと同じように、我々の生きるこの日本の社会全体が、後継者がいないという問題を抱えていますよね。

新 ええ。土地の所有についても、近代家族の崩壊とともに不動産が死蔵化してしまっています。本来、跡継ぎがいないのならば、不動産などのストックはなるべく早く家族以外に引き継いでいけばよいはず。しかし、商店街の店主は、跡継ぎがいなくても、不動産を固守しよ

うとする。残されるのはシャッターが閉じたままのお店です。こうして商店街は内部から腐っていく。次にダメになるのは、同じく近代家族が土地を所有している郊外住宅地かもしれません。

藻谷 郊外団地は、まさに商店街とまったく同じ問題を抱えていますよね。この本を「ニュータウンはなぜ滅びるのか」という題にして、固有名詞をいくつか入れ替えるだけで、そのまま二〇年後に出版できるかもしれない（笑）。

新 町づくりにおいてもこの問題を真剣に考えていかないとけません。近代家族の論理だけで地域整備をしていては、すぐに限界がくるはず。藻谷 そのそも、新さん自身が、近代家族を持っていないですもんね。

新 たしかに独身ですから（笑）。さらに言えば僕には、自分の命を超えて何か引き継ぐべきものというのが、何もない気がするんです。それは多くの若い人たちも同じだと思っんですが、自分にとって一番重要なものは命しかなくて、死んだ後もこの世に残したいものがある

かという、哀しいことに見当たらない。
近代家族が成り立っていた両親の世代ぐらいまでは、毎年必ず墓参りに行く習慣がありました。それはおそらく先祖のためということよりも、「墓というのは自分の命を超えて残るものだ」という、ある種の信頼だったように思います。

柳田國男が『明治大正史・世相篇』の中で、印象深いエピソードを紹介しています。九州・門司で師走の寒い雨のさなか、九五歳の老人が傘も持たずに一人とぼとぼと歩いていた。この老人を警察で保護したところ、背負っていた風呂敷の中から四五枚の位牌が見つかった。祖先を祀らなければ死後の幸福を得ることができないから老人は位牌を肌身離さず持ち歩いていたわけですが、この老人は死後誰からも祀ってもらえないのです。

この挿話は、一世代前であれば哀しい物語として受容されたのでしょうか、僕はどこか遠い話のように読んでしまいました。僕には祖霊を祀るという感性すら喪われているようなのです。

藻谷 話がさらに本質的な方に向いてき

ましたね(笑)。私はマセた子供だったので、「自分がいなくなった後も残るもの、残せるものは何か」ということを小学生の頃から考えていました。父は戦争孤児で、先祖からの家業を失ったサラリーマン、私はその次男坊です。企業経営者や官僚、政治家にしても、在職中は偉そうだが、結局何も残せずに死ぬ。むなしいものだ、当時から思っていました。

そんな中、社会に出た頃に気付いたのが、奈良の室生寺の五重塔を最初に建てた宮大工は、名前は残っていないけれども立派に存在証明を残したということです。建てて千年以上たった現代に台風で壊れたその塔を、着ている服も食べているものもまるで当時とは違う現代人が、当時より伝えられた技術を使って、元の通りに修復しました。丹下健三の都庁や、黒川紀章のマンションが壊れたとして、後世の人はあのデザインどおりに直さないでしょう。平安時代の無名の大工の方が、彼らよりよほどすごいものを残したのです。

とはいえその頃の私はまだ、そんな話

は一般人には無縁、普通の人生に残せるものなどないと思っていたのです。ところが全国各地で町づくりで人生を賭ける人たちと出会っていくうちに、「ああ、この人たちは自分の町が、室生寺の五重塔と同じように、自分の人生を超えて残り続けると直感しているからこそ、ここまで頑張れるのだな」と気付きました。

新なるほど。それはすぐわかります。僕自身、まさにそう思っていますから。原稿を書きながら、墓を残すことを知らない世代として、墓に替わるものって何がある？ と自問自答したときに、それが商店街なんじゃないか、と思ったんです。藻谷 よくぞ言ってくれた！ 商店街が、我々にとっての室生寺の五重塔だと。

新 そうですね。本当にそう思うんです。商店街はたしかに世間で思われているよりもはるかに歴史の浅い近代の産物で、社会の変化と共に存亡の危機にある。でも、ある部分では絶対に残すべき価値のあるものを含んでいるし、今後の可能性を模索できるはずなんです。

藻谷 我が意を得たりです。嬉しいです

ね。まちづくり関係者以外で、そう言い切る方には初めてお会いしました。

土地に執着する日本人

新 近代家族崩壊後の問題点として重要なのは、今後、資産のマネジメントをどういう形で行っていくかということでしょう。個人を超えた存在として、企業というのはいつの解ではありませんが、あくまで利潤を追求するための組織です。これからは何か別の、地域の資産管理をしていくための仕組みを考えないといけないでしょうね。

そういう意味では、有限な存在である

藻谷浩介

もたに・こうすけ

1964年山口県生まれ。東京大学法学部卒。2000年頃より地域振興の各分野で精力的に研究・執筆・講演を行う。主な著書に『デフレの正体』、『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』（共著）他多数。



個人を超えるものとして「法人」という概念をつくり出したのは、近代の最も重要な発明のひとつだと僕は思っています。藻谷 ところがほとんどの法人は、個人よりも寿命が短い。個人を超えたものとして法人を置くというのは、いわば抽象的な人格が人間を超えて存在するという、キリスト教的な概念ですよね。

しかし日本においては、そういう抽象的な人格よりも、もっと地に根付いたもののほうが続くと思われている。「あそこの磐座には神がいる」という感覚を、現代人も古代人も同じように持つことがある。「縁結びの出雲大社にお参りする」と、いい人が見つかるかも」と聞けば、近場にも大国主命が祭神の神社はあるのに、やっぱり本場の出雲まで行く。本「場」というのは示唆的な言葉です。

要するに日本人は、一神教を生み育てた砂漠の民に比べて、場所というものに対する感度が高い。だから、自分の住んでいる町、地域というものをこそ、自分の生を超えて続いていくものだという考え方を、共有しやすいと思うんです。

ところが今、その拠り所となるはずの町では、底地も店の建物も、法律上、完全な個人財産になってしまっている。これは実にまずいことです。

たとえば先ほど挙げた室生寺は、法律上は真言宗室生寺の所有ですが、室生の人たちは明らかにそう思っています。先祖代々守ってきた地元の寺だと思っていますし、もちろん真言宗の側も、「当宗の寺だからどうしようと、誰に売ろうと勝手だ」とは絶対に考えない。本来、寺だの町だの、個人を超えて残すべき存在は、個人や法人の財産であると言いつてはいけな、グレーゾーンなのです。

本当はそういう存在は法人、寺などではなくて株式会社の所有にし、地元の関係者が株主になる方がよいはずです。

新 でも、それはまだほとんど実現できていないですよ。

藻谷 実験的な試みはいくつかあります。たとえば、高松市の丸亀町商店街再開発事業のA・C街区では、地権者たちが土地を自分たちの出資したまちづくり会社

に貸し、会社が土地の上に建てたビルは区分所有ではなく持分所有にする、という方式を取って成功しています。

考えてみれば日本人は、道路や上下水道は共有財産として認識しています。これらは皆の税負担で維持して当たり前だと思っている。赤字の鉄道は廃止しろと言うのに、道路も維持管理費を考えれば大赤字なのに廃止しろとは言わない。

ところが、その道路で区画された個人の土地の話になると、まったく話が違ふ。他人の土地に税金を使うことはもつてのほかだし、逆に自分の所有地はどうしようと自分の勝手、一切口は出させないというような意識でいるのは不思議です。

道路の修繕や整備、除雪までをすべて公のお金で賄うというシステムを、今の規模のまま、人口の減る時代にずっと維持できるとはとも思えません。片やそれによって区分けられた土地は、近代家族の解体に伴って相続人も減り、スカスカに空いていくばかりなのですから。

夕張市の高台住宅地に行くと、行政がお金をかけて維持している道路が空き地

を囲んでいて、たまに家があるという景色が広がっている。夕張限定の問題ではなく、これがこれからの日本の姿なんです。道路は共有地、土地は個人所有のままで、私有地部分に人がいなくなる。

新 そうですね。被災地でもその問題は持ち上がっていて、法律に従うと、自衛隊は道路にある瓦礫しか処理できないんだそうです。当たり前ですが、津波は道路も私有地も関係なく襲い、瓦礫が転がっているのに、法律上は、私有地に手をついたらダメだということになっている。

東日本大震災のときにはさすがに、自衛隊が、行方不明の人たちの捜索をするという方便で、法律を拡大解釈したようですが、もともと法律に無理があるんじゃないでしょうか。

藻谷 津波被害が最もひどかった宮城県の新雄勝町(石巻市)に、いつとき、「瓦礫はここに置いて頂ければ処理します」という看板がありました。ですが持ち主がよくわからない区画は、ぐちゃぐちゃのまま。「解体してほしい家は、札を掛けてください」というルールもありまし

たが、掛けない家については壊せない。地権者の意向確認ができなくとも一括処理するという決断を、震災という非常時ですらなかなかできなかったわけです。

新 同じ理由で、所有者がわからないから誰も使えない、ほかのことに転用したくても手をつけられない「腐った土地」が大量に現れています。しかもそれは少子化と高齢化に伴って、今後、ますます加速度的に増えるでしょう。

藻谷 被災地ではその問題が、時間を先取りしてはつきりと露呈しましたね。

被災地に見た商店街の可能性

新 震災は本当に悲しいできごとでしたが、一方で被災地で目にした現状は、この本を書き上げるにあたって非常に大きな示唆を与えてくれました。

実は、震災前までは本の出口がなかなか見つからなかったんです。商店街の今後について、あまり救いとなるような要素が見つからず言葉を濁していたので、原稿を読んだ人からは「で、結局何が言いたいのか?」「それで、商店街をどうし

たいの？」と言われ続けていた(笑)。

藻谷 本当は実態がどうなっているかを
書くだけでも、十分意味があると思いま
すけどね。実際、社会学という学問が、
流行のリフレ論のような空想非科学小説
的モデルに陥ることなく、現実の世の中
の変化を捉え、事実の奥底を語っている
ということに、感動しましたから。

新 ありがとうございます。ただ、自分
としても、社会学の研究者という立場か
ら、上から目線で「社会ってこうなっ
てるんですよ」と科学的・標本的に書くの
が、すごく嫌だったんです。たぶんどこ
かで、本を書くことで世の中に何かしら
介入したい、難しいかもしれないけれど、
どうせなら社会を少しでもよい方向に動
かしたいという思いがあったんだと思ひ
ます。商店街をこれからどうしていくべ
きなのか、やっぱり自分の中で何か結論
のようなものがないとだめだろうなど。
ちょうどそれで悩んでいるときに、あ
の震災が起きたんです。実は当初、あま
りのショックに精神的にまいってしまっ
て、二ヶ月くらいずっと家の中に閉じこ

もっていたんです。でも、そのときに尊
敬する社会学の先生から、今この時期に
社会学者が発言しなくてどうするんだ、
と言われてしまった。ちょうど知り合い
が石巻でボランティア活動をしていたの
で、「おまえ、見にいって、ボランティア
アのことを書いてこい」と半ば強制的に
行かされたんです。

藻谷 なるほど。でも、そういうきつ
けでもない、なかなか行きにくいです
よね。「何しに来た」と言われそうで。

新 そうなんです。僕は阪神・淡路大震
災の時にボランティア側の人間だったの
で余計に、「大変なときに学者モドキの
奴が、話を聞かせてなんて言うのは失礼
じゃないか」と思ったんです。

藻谷 私も、阪神大震災の二ヶ月後に、
三宮の駅前に「頑張ってるから見に来る
な！」と大きく書かれていたのを思い出
して、東北の被災地巡りを震災後一ヶ月
半ほど自粛していました。でも、行かね
ば何もわからない。そうだったでしょう。
新 はい。不安に駆られながら被災地に
行きましたが、現状を見ないとわからな

かっただろう発見がたくさんありました。
一番驚いたのは、石巻の商店街地区には
本当に大勢のボランティアがいたのに、
多賀城市のショッピングモール地区には
全くいなかったことです。

先に多賀城のほうに行ったんですが、
駅前にはタワーマンションになっていて、
近くに国道のバイパスがあり、そこにイ
オンやヤマダ電機、マクドナルド等があ
るんです。ヤマダ電機だけはもう開いて
いたんですが、イオンはまだショッピン
グカートが歩道のところに投げ出された
ままの状態で放置されていました。

藻谷 あそのヤマダ電機は、二階が店
舗で一階は駐車場という形態だったため
に、売り場が無事でしたよね。

新 ええ、そうです。さすが、すごいデ
ータベースですね(笑)。

ただ、開いている店舗があっても、ト
ラックだけが走っている状態で、とにか
く歩いている人が全くいなかったんです。
それが被災地の風景なのかなと思って、
次に石巻に行ったら、被災した商店街に
はボランティアの人がたくさん来ていた。

しかも、東京から来た、自分の地元の商店街のことすらよく知らないような若者たちが、ボランティアをやることで商店街のことを知り、そこにいろいろな可能性を感じたと口々に言うんです。

藻谷 チェーン店は大手資本が自力で直せばいいでしょう、と放置されていたのに対し、商店街には関係のない人々の力も結集させる何かがあったと。深いものを感じさせる現場体験ですね。

同じイオンでも石巻店は避難所として開放されて、コミュニティの拠点になりましたが、多賀城のロードサイド地区ではそもそも周囲に余り住人もいない。新 ええ。ボランティアだけでなく、津波のあとも商店街に住み続ける人たちが、商売の再開を願っている人たちがたくさんいたんです。商店街は単なる商業集積地区ではなくて、人々の生活への意志があふれている場所だということを身をもって感じました。被災地に行くことで、新しい希望の形として商店街を提示できる、そう確信して拙著の方向性が定まったのです。

「町」を残す意義

新 本を出した後も、二週間に一回くらいのペースで、岩手県大槌町に行き続けます。地形的に津波の被害を受けやすく、震災でほぼ壊滅状態に陥ってしまった場所です。

藻谷 あそこは本当に凄惨でしたね。津波の後に漏電による火災で黒焦げになった市街地を見て、私の父親が見た空襲後の富山市もこうだったのだろうと思いました。まさかそんな光景を、現代に生きる私までもが見ることになるとは。

新 しかもあの地域は、震災から二年以上が経った今でも、復興がほとんど進んでいないんです。東京の人は、その光景を見て「国や自治体は何もしていないせいだ」と勘違いしがちなんです。実際はそうではなく、みんなが一生懸命やってあの状態。余計に問題は深刻です。

藻谷 それはつまり、先ほどの近代家族の話と同じで、個々人が持っている土地所有権などの権利が、相続でゴチャゴチャになって、まったく処理できない状態

だからということですか。

新 ええ、そうです。ほかに、そもそも行政が分筆登記など土地の管理をきちんとできていなかったという問題も重なっているようです。

藻谷 震災前の時点から、もともと地籍調査ができていなかったと。

新 おそらく半分以下ぐらいしかできていなかった。今の法体系のまま順序どおりにやると、もうあと三年くらいは、このままかもしれません。

藻谷 要するに、番地と現実の土地が一致しないという問題がある上に、その土地を誰が持っているかもわからない、と。新 そうなんです。その結果、仮設住宅、仮設商店街が今でも続いているわけですが、仮設商店街は、僕から見るとほとんど商店街と呼べる状態ではありません。たとえば大槌の仮設商店街には八〇ほどのスペースが用意されていますが、生鮮三品(肉・魚・野菜)は鮮魚店の二店舗しかない。なのに美容・理容が一二店舗もあって、飲食は八店舗。生活に必要なものを売るといって体をなしていないんです。

おそらく、大槌にもともとあった商店街も同じような状況だったはずです。これでは、町を復興できたとしても、商店街は生活と密接していないためにすぐにシャッター街化してしまうでしょう。

正直な話、今の状態では、町をどうつくればいいのかがまったく見えてこないんです。「緑豊かな大槌」とか、耳あたりのよい町の再建コンセプト案はいろいろと出ているようですが、それ以前の問題に直面していると思います。

そしてそのことは実は、大槌町だけでなく、今の日本全体に言えることだと思います。そもそも本当に町が必要なのかというと、実は既に私たちは、ほぼ町が要らない生活スタイルになっているのではないのでしょうか。必要なものはネットで注文すれば何でも自宅まで配送される時代です。究極的に言えば、町にないと困るのは、それこそ美容院と飲食店くらいかもしれません。

つまり、今私たちに突き付けられているのは、「町づくりとか言っているけれど、そもそも町ってもう要らなくない?」

という根源的な問いではないでしょうか。この問いに一人ひとりがどう答えるか、それが求められているように思います。藻谷 それは「町」を「商店街」に置き換えても同じことですよ。

新さんはこの本の中で商店街のことを「専門性もない、恥知らずの圧力集団になった」と一刀両断されていました。各地に例外はあるのですが、多くはその通りです。今の商店街を守らなければという論陣を張ったところで、商店街に対して「政治力を使って権益を維持し、町を私物化してきた集団」というイメージをもつ多くの人たちはついてこないでしょう。その実態は既にボロボロで、このままでは町としてあまりに悲しいからなんとかしませんかと言っても、住民、特に年長の男性が賛成しない。それが、全国で遭遇する悲しい現実です。

そのときに、専門性を持って奮闘している一部の商店主と手を組んで、「この町をなんとかしたい」と動きだすのは、大抵若い男女です。町が栄えていた頃を知らず、ノスタルジーも抱かない世代な

のに、一体何をもって、そう思うのか。もちろん、東京みたいにお洒落で楽しい場所がうちの町にもあったらいいのに、とか、外からお客さんが来たときに連れていける賑やかな場所があったらいいのに、という発想もあるでしょう。

でも、より深い動機として、自分が後世に残すべきものがこのままでは何もない、せめて町を残すことに参加したい、という思いもあるんじゃないかと思うんです。ただ大型店と住宅がまばらに建っているだけの、どこにでもある郊外の風景を、これがうちの地元だと残していくのは、あまりにも寂しい。そう気付く若者が増えているんじゃないでしょうか。

離島とか田舎なら、田畑や自然を残していけばいいんですが、多くの都市住民、郊外住民には、そういうわかりやすい「残すべきもの」がない。だから、残すだけの価値のある町を作りたい、と思う。もうちょっと受動的に言うと、信金バンクのCMのように、「この町ととも年を取りたい」みたいな感覚。

ただ困ったことに、地方政治のイニシ

アチブを取っている六〇代以上の男性の多くには、驚くほどそういう感覚が欠けているんです。「自分」の「今」が大事で、未来や子孫に向けた思いなんてない。

新 それで思い出したんですが、以前、建築家から聞いて、とても印象に残っている話があるんです。ヨーロッパの教会には、よくステンドグラスがありますよね。あのステンドグラスの模様は、単なる意匠ではなくて、その地域の記憶を保存するという意図があるんだそうです。

その図柄を見ると、その地域でどういうことがあったか、思い出せるようになっていく。近代人であれば文字で書き残して記録しますが、昔は識字率も低かったので、皆が集まる建築物に、その土地の記憶が描き込まれていたんですね。

この話で思ったのは、昔も今も、町って記憶の集積体なんだ、ということなんです。現代に生きる私たちも、町の風景を見て初デートのことを思い出したりとか、ちよつとした斜面や段差を見て、小さいときにここで躓いて骨折したなってことを思い出したりするはずですよ。

そして今、町とはそういうものだというところを一番よく知っているのは、実は地元の前で夜な夜な踊っているダンサーだったり、あるいはスケートボードをやっている兄ちゃんだったりするんです。要するに、地べたで活動している人たち。

横浜線のような郊外のJ.Rの路線って、大抵二階に駅舎があつて、一階はショッピングセンターになっている。そのガラスが非常に大きく作られているので、そこでダンスをやっている人たちがすごく多いんです。しかも彼らは、J.Rの駅長さんと仲良しで、駅近辺の掃除もしている。サラリーマンはそういう奴らを一段下に見ていたりするわけですが、彼らは酔っ払いが捨てた吸い殻とかを掃除して、ダンスをやっているんです。

彼らにはすごく強い地域愛があつて、たとえば相模原にいるチームは、自分たちのことを「レペゼン相模原」って言うたりする。レペゼンというのはレプリゼンテーション、つまり自分たちは相模原を代表しているんだと。それは国内のことに留まりません。たとえば彼らはニユー

ーヨークに行っても同じことを言うわけです。神奈川に相模原という場所があつて、俺はそこのレペゼンでやってるんだ、と言って、ニユーヨークで踊ったりする。

そういう若者たちを、郊外の団地に住んでいるサラリーマンがバカにするという、不可思議なことが起きているんです(笑)。本当は彼らのような若者をもうちよつと地域づくりに参画させていけばよいわけですが、こうした若者の存在をまちづくりに関わる人たちが知らなかったりする。

藻谷 イケイケの兄ちゃんたちの、妙に熱い地元愛ってありますよね。資産保有層の保守ではなく、カネもないけど地域を受け継いで残していこうという保守的なマインドを持っている。彼らを「ヤンキー」と呼ぶ斎藤環さんの目線にも共感できるんですが、そうしたヤンキーの力を商店街の各種イベントに取り込んでいる長崎県佐世保市のような例もある。青森市のねぶたのハネトもそうです。

ショッピングモールが地元

藻谷 近代家族が崩壊しても人間にはや

はり何か拠って立つものが必要で、だけど今時、多くの人は、家族や会社が続いていくことを期待できない。国では余りに大きすぎて実感が乏しい。そこで、地域だと思ふんです。外部の人間を排除する閉鎖的なものではなくて、今、被災地で外来のボランティアと地元に残った人たちの間で始まっているような、比較的オープンな地域主義。顔の見える範囲で何かを築いていこうとする人は、どんな増えるんじゃないでしょうか。

もちろん途中でやめて出ていく人も多いでしょうが、それまでにその人がやったことは、何かしらその土地に残る。中には水が合って、ずっといる人も出てくるかもしれない。今後の日本では、出入り自由を前提に、今いる地域を良くするぞと行動することがスタンダードになるのではと、密かに期待しているんです。自分が死んだ後にも残る、自分の町の歴史のページに少しでも手を貸したという実感は、他では得がたいものだと思ふんです。だって、身近にありながら自分を超えていく存在って、企業も家族も

先行き怪しい今、他にないんですよ。新 わかります。僕もその期待はありますし、実際そういった現象が各地で起きつつあるように思います。

ただ、そこでちょっと問題になるのは、藻谷さんの世代は、恐らく商店街とその地域性が結構リンクしていると思ふんですけど、僕より下の、二〇代以下の郊外に住む若い人たちにとっては、ショッピングモールこそが地元だという意識になっていることです。

藻谷 なるほど、そうですね。

新 実は、その人たちが地域にこもってしまっているという問題もあるんです。というのも、地域愛のある人ほど、非正規雇用で働いている。友人の社会学者である阿部真大君によると、今、地域にこもっている若者たちが目指す職業は、綺麗に二分されているそうです。

一つは、数はかなり少ないんですが、警察官や消防官。特に都市規模が小さくなればなるほど、警察・消防しか働き口がなくなります。公務員試験業界では、関東・中部地域以外では、旧国家公務員

Ⅱ種の難易度がⅠ種試験とほぼ同じくらいだと言われています。ただ、旧国Ⅱの勤務先はどうしても大阪や札幌といったブロック都市になりがちです。自分が生まれ育った地域で働こうとすると自治体職員とならざるをえないわけですが、かといって、市役所の事務職の募集も少ないので、警察・消防を目指すしかないですね。

もう一つ、警察・消防ではないところで地元に残るといったら、ショッピングモールとなりがちです。不安定な立場で賃金も安いけれど、多くの職を提供しているのは事実です。

確かにショッピングモールは、子どもたちにとってすごく居心地のいい空間をつくり上げました。あそこだったら大声を出しても、走り回っても、よほどでない限り文句は言われないでしょう。

藻谷 ですがそのショッピングモールが、商店街と同じように、後世に残していくべき地域の拠点、皆の記憶の集積場所になりうるのか、ということですね。新 そうです。

藻谷 新さんの本は、昔、村上春樹が商店街でジャズ喫茶をやっていた話から始まっていますが、彼と同じことを、昔出会ったある店主が言っていたのです。

「商店街ってのは、弱小な一個人が事業者として、大組織や大手資本に対抗しながら、なんとかやっていける、地域でただ一つの空間なんだ」と。その通りです。町を失くした地域の人は、ショッピングモールで単なる消費者になるか使用人になる以外に道がないですよね。

つまり、ショッピングモールは消費する場としては愛すべき空間であっても、そこに使用人以上の者として係わり、自分が生きた証として後世に残して行く場には、残念ながらなりえないでしょう。

もちろん可能性としては、たとえばショッピングモールの一部を闇市のようにして、大資本以外の人が出せる空間に発展させるということもくはない。沖縄には地場資本がそういうのを作った例もありますが、普通の場合、自分が経営側に回りたい人は、商店街の残っている町に引っ越してしまうでしょうね。

アントレプレナーシップを生かす

新「町、あるいは都市とは何か」。その定義は数多くありますが、僕が最近読んで「なるほど」と思ったのは、「アントレプレナーシップが発揮できる空間である」という定義です。アントレプレナーシップは、「冒険心」とか「起業家精神」と訳されますが、要するに自分で事業を起こす精神性みたいなものですね。

私たちはなぜ、商店街に感じる「町らしさ」を、ショッピングモールには感じないのか。たくさんのテナントが入るショッピングモールだって、生鮮三品の専門店を並べて商店街らしくすることはできるでしょうが、私たちはそれを「町らしい」とは思わないはずです。それはなぜか。

おそらくそこに欠けているのが、アントレプレナーシップなのではないかと思えます。つまり、自分で事業を起こしたいという人がいて、その思いを生かすことができる空間がある。こうした空間や舞台を、私たちは無意識に町や都市と言っているんじゃないか。そして、アント

レプレナーシップを発揮して店舗を出した人たちのことを零細事業者と言っているんじゃないかと思うんです。

しかし今、それをやろうとする人は少ない。実際、自営業の割合は減り続けています。そして、現存する零細自営業者たちは、事業意欲を失ったまま、退場するわけでもなく町にしがみついている。新しく出店するのは、大手小売店の息がかかったチェーンばかり。都市的なもの、町的なものがなくなってきたと思うんです。

藻谷 起業家精神を持つ若者は今もいます。ですが、それが商売で花開くには、根・葉・茎が揃う場が必要なのです。

根は住居、葉は職場です。居住者しかいないのが団地、職場しかないのが工業団地やオフィスビル街ですが、これらは町ではない。なぜなら、前者は住む人しか、後者は来る人しかいないからです。住居と職場が混在してこそ町と呼べる。加えて茎＝公共的な施設も必要です。中でも一番人を集めるのは病院や学校ですね。根・葉・茎が揃って初めて、住む人と来る人が一緒に歩く場となり、零細店

にも売り上げという栄養が行き届く。

理屈ではないんですが、これがこれまでもあらゆる町を観察して得た結論です。

新なるほど。

藻谷 この反対をやっている地域、つまり、郊外農地を開発し、住居と職場と公共施設と大型店をそれぞれ無料駐車場付きで分離させ、移動は全部車で、としてしまった地域からは、起業家が生息できる空間が存在しなくなってしまった。

面白いことにそうした土地からは、文化的なものがなくなっていくんです。モールに並んだ物資を消費して満足している人だけになった地域からは、ユニークな雑貨屋とか、こじやれたカフェ、尖ったイベントも消えていく。残念です。

ちなみに、アントレプレナーが存在できるかどうかは、人口規模とは関係がない。東京都小笠原村の父島は、人口千人少々ですが、人の行き交う商店街があり、若い創業者がたくさんいます。

逆に私が多年民間有志のまちづくりを手伝ってきた静岡県のある市では、商圈規模は大きいのに商店街から百貨店が

続々撤退。しかもいまどき市長自らが郊

外農地をつぶして巨大モールを誘致しようとしている。起業家精神を受け入れる商店街という場を捨て、若者が後世に自分の町を残す可能性を絶とうとしているのに、市民はそれでいいのでしょうか。

新「アントレプレナーシップを持て」というと、これまですぐハードルが高く思われてきたし、あるいは「若者に起業家精神を持たせなければ」というような、押し付けがましい言葉として、今の若い人たちは理解してと思うんです。

でも、そうではなく、藻谷さんが先ほど言われたような、今、徐々に増えている地域にかかわろうとしている若い人たちに対して、一緒に地域の中でアントレプレナーシップをつくっていくようにというふうに提示することは可能だろうし、それを生かせる空間を保持していくのが、上の世代の責任のような気がします。藻谷 年長世代が守る商店街に、若いロールモデルがいるとさらにいいですね。カフェを開いたお姉さん、古着屋の兄ちゃん、後の世代の目標になります。

新 そうですね。あまり理屈っぽく言う

より、実例を見せていくことが、これからすぐ必要なことだろうと思います。

それが先ほどの、ショッピングモールの非正規雇用という問題に対して、唯一対抗できるものになるかもしれない。

藻谷 起業家精神とまで言わずとも、人間には大なり小なり独立心はあるわけで、まちなかで一步、踏み出してみることですよね。それは人間の本質であって、そうじゃないと社会は発展しない。

新 そうですね。本では商店街存続のための規制と給付のバランスの話になってしまっていて、アントレプレナーシップの論点についてほとんど書けなかったので、今日、お話しできてよかったです。

藻谷 いや、規制と給付の話も、本質を突いていますよ。新さんはじめ、現実を見据えて議論を展開する気鋭の研究者がどんどん出てきている社会学のこれからに、大いに期待したいと思います。

新 ありがとうございます。まずは、自分の近代家族の形成に向けてがんばります(笑)。